

中長期目標 (学校ビジョン)	<b>学び 輝き 感動のある学校</b> 幼児・児童・生徒が充実した学校生活を送り、個々の可能性を伸ばし、よりよく生きることができるようにする学校 《 18歳で自立できる人を育てる ～将来を見とおした今のQOLの向上～ 》	今年度の重点目標 1 幼児・児童・生徒一人一人が「いきいきと学ぶ」教育に努める。 2 保護者の願いや地域の期待に応える。 3 幼児・児童・生徒の健康と安全を守る。 4 センターの機能を推進する。 5 開かれた学校を推進する。
-------------------	---	---

年 度 当 初			評 価 結 果 ( 9 ) 月				
評価項目	評価の具体項目	現状	目標 (年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
幼・小学部	確かな根拠に基づく支援や学習の充実	○一人一人の子どもたちと向き合い教職員で実態や課題を共有しながら、学習を積み上げることができた。さらに新学習指導要領を基に、研修を深め学習の精度をあげる必要がある。 ○医療的ケアを必要とする超重度や病弱の児童が増え、障がいに応じた支援や学習を精選する必要がある。	○新学習指導要領を基に研修を深め、障がいや発達段階に応じた学習が行われ、学習の内容や教材の精度が上がり、根拠のある学習ができています。	○新学習指導要領について、読み深めたり他校の実践例を集めたりしながら、根拠のある学習について研究を深める。また、日々の授業について振り返る時間を設け、共有できる時間を意図的に設ける。 ○障がいに応じた必要な環境を、学部内で協力しながら整備する。また、より良いと思われるアイデアを出し合い、日々の改善に努める。	○新学習指導要領を基に研究を進め、学部内で研修を深めた。個人やグループで読み深めることで活発な意見交換ができた。学習計画や教材の精度をあげ、障がいの状況や発達段階に応じた学習かどうか、成果につながったかどうかの検証をさらに行う必要がある。 ○学習の振り返りや、幼児児童について話し合う時間を週に1度以上持つことができた。より有効な時間となるよう、話し合いや研修の内容や進め方を整える必要がある。	C	○研究で行う授業改善を基に、成果としての振り返りを視点を持って行う。有効な教材や学習の組み立てを共有し、他者評価を受けられる機会を設ける。 ○全員が研修や話し合いに参加できる時間設定を行う。障がいの状況や発達段階に応じた学習について等テーマを決め、目的に沿った研修や話し合いについて意識する。研修を計画的に行い、記録として常に振り返られるよう資料の整理を行う。
	主体的に取り組む力を育む教育の充実	○授業について教師間で情報交換ができるようになってきた。授業や行事において生徒は力をつけてきているものの、受け身になりがちな現状がある。授業や行事、さらには生活に対してより主体的に取り組む力を育てる必要がある。 ○生徒の課題や目標について検討を重ねてきたが、家庭や地域生活での課題が学校での学習目標により反映されていく必要がある。	○「わかった」「できた」と生徒が実感することができるよう授業改善を行うことができています。また、役割を意識した活動や人との関わりを充実させた行事や体験活動を設定することができています。	○支援方法や指導内容についてそれぞれの教師がもつ課題を出し合い、授業改善に向け複数の教師で検討・共有する機会をもつ。 ○行事や体験活動では、生徒が主体的に取り組むための視点を持ち、学習グループや担当者で計画をたて学部でも検討する。 ○学校生活における実態把握のほか家庭からの情報を収集し、目標の妥当性や指導内容等について月に1回、学習グループで話し合う場をもつ。進路体験の前には、学習グループに加え、学部全体で見直す機会をもつ。	○授業をするにあたり支援方法や教材の使い方など話し合う機会を設けることができた。「わかった」「できた」を生徒が実感しているか、またそれを教師が把握する手立てや視点をもって授業しているかということについての検討が足りなかった。 ○行事等の計画や事前学習の段階で、役割を意識して進めることができた。人との関わりに関しては個人の活動を重点において進めてしまうこともあった。	C	○学部会や型の会のとき、授業について検討する時間を短時間持つ。校内研で検討したこと(授業でつきたい力や評価等)をもとにアイデアを出し合えるようにしていく。 ○後期行事(進路体験、学部集会等)や学習の中に主体的に取り組めるよう役割意識を持つ、人との関わりを意識するという視点をグループの会や学部会で確認する。
	自立した生活に必要な学習の充実	○生徒一人一人の自立のイメージ、卒業後の姿の捉えに違いがあり、指導内容や支援にブレを生じることがある。 ○生徒が、自己理解を深め自分の課題に気づいたり目標に取り組んだりする主体性を、十分に引き出せていない。	○何につながる指導や支援であるのか、検討会、事例研等で指導の方向性を絞り込み(合意形成)、チームで取り組み生徒の自立度を高めている。	○一人一人の生徒の自立した生活や卒業後の姿について共通理解を図るためにグループや学部の時間を設ける。 ○指導力の向上のために、学部研修を企画し行う。 ○指導内容の工夫や改善、支援の精選を図る。 ○卒業生から学んだり、自分の考えを伝えたり、実践的に学んだりする体験学習の充実を図る。	○グループの会(個別の指導計画検討会、現場実習に向けてなど)や学部会での生徒情報の共有をしている。事例研は、まだできていない。 ○校内研究をとおしての授業づくり・改善を進めている。 ○報告会や発表会等は、全校に呼びかけ児童・生徒や職員が聞き合う機会を大切にしている。 ○現場実習を通して、自分の不安や課題に気づいたり、具体的な目標を持って取り組んだことで自分ができることが広がったりした事例がある。日々の生活や学習の中で、自立度を高める指導が必要である。	C	・検討にあたり、より具体的な場面や生徒の姿やつきたい力を考えるとともに、指導や支援について職員の意見を出し合い取り込む機会を設ける。 ・授業改善した内容や支援の方法などを共有し、指導力を高める。 ・指導の方向性について、保護者と共有することを大切にする。
一人一人が「いきいきと学ぶ」教育の充実	障がいの実態に応じた教育課程の編成	○今年度より義務教育に病弱教育が設置された。また病弱教育の分校も設置され、これまで以上に幼児児童生徒の実態の幅が広がった。それに伴い、より障がいの実態に合った教育課程の検討が必要である。また、新学習指導要領の内容について周知していくことが急務となる。	○新学習指導要領に基づき、障がいの実態に合った教育課程が十分に検討、編成されている。	○夏季休業中から学部、グループごとに検討ができるように、会の日程調整を行う。 ○教育課程編成説明会の内容を全体に周知し、検討事項を確認していく。昨年度からの課題となる教科学習の捉えについて重点を置いて検討する。 ○研究・研修部と連携して、新学習指導要領の内容について学ぶ機会を設定する。	○7月に第1回検討委員会をもち、検討の柱とする教科学習の捉えについての現状を確認して方針を決めることとした。新学習指導要領の内容に基づき各学部で検討中であり、全体ではまだ周知ができていない。 ○単独での研修会は企画実施していないが、研究・研修部と連携し研修会事後アンケートを集計して感想や学びたいことについて把握した。	C	○今後、検討委員会を実施し各学部の現状をもちより、教科学習の捉え、学校としての系統性を重点に置き、すり合わせをしながら検討を進めていく。県への申請前に職員会を設け、各学部で編成した教育課程を全員で確認する。 ○各学部や分掌と連携を図りながら、校内研究日や学部裁量日、個を語る会等を行事予定に位置付ける。また新学習指導要領に基づいた話し合いができるように、話す内容の視点について提示していく。
	生活につながるICT機器の有効活用の推進	○ICT機器を日常生活の一部に取り入れ活用している事例や考え方の紹介や校内の実践事例をまとめ情報提供した。また、校内にあるICT機器の使用法を紹介するとともに、ICT支援事業の授業支援・相談体制の利用促進の工夫をしたことで、生活につながるICT機器の活用を意識した取り組みが行われるようになってきたが、新転入職員も含め理解を深める必要がある。	○生活につながることを意識したICT機器の活用方法についての情報提供や相談への支援がなされ、生活場面につながることを意識した取り組みが行われている。	○生活や仕事にICT機器を活用している事例を動画も交え紹介し、職員間でICT機器を生活で活用する姿を共有できるようにする。また、校内で行われているICT機器を使用した取り組みを事例として取り上げ、生活につながる視点とつなげて紹介する。 ○ICT機器を活用しやすい環境整備と支援体制に努める。 ○ICTサポート支援事業との連携を密にし、活用する。	○生活につながることを意識したICT機器の活用方法について研修を行い、ICT機器を活用する考え方や事例について動画も交え紹介し、職員間でICT機器を生活で活用する姿を共有できるようにした。また、校内で行われているICT機器を使用した取り組みを事例として取り上げ、現在や将来の生活につながる視点でまとめ、職員へ発信した。 ○ICT機器を活用しやすい環境整備と支援体制として校内にある機器の紹介や簡単な活用方法についての情報提供が行えなかった。 ○ICTサポート支援事業の告知などをアナウンスしたが十分に活用できていなかった。	C	○引き続き校内で行われているICT機器を使用した取り組みを事例として取り上げ、現在や将来の生活につながる視点で活用事例をまとめ、職員へ情報を発信していく。 ○ICT機器を活用しやすい環境整備と支援体制として、活用しやすい整備に努めるとともに、機器の紹介と簡単な活用方法についての情報提供に努める。 ○ICTサポート支援事業を活用しやすいようにヒアリングも行いニーズの掘り起こしをする。

様式2

<p>進路指導課</p>	<p>キャリア教育の推進と進路指導の充実</p>	<p>○キャリア教育の基本的な考え方については、昨年度までの2年間で定着してきた。引き続き、幼児・児童・生徒・保護者のニーズをもとにキャリア教育の視点で学習活動を見直すとともに、新転入教職員も含めて本校の進路指導への理解を深める必要がある。</p>	<p>○8割以上の教職員が、キャリア教育の視点でつながりのある学習活動が各学部間で実践されていると感じている。</p>	<p>○今年度の課題や次年度の展望に沿う進路研修会を企画、運営する。 ○系統性や連続性を意識した指導ができるように、キャリア教育の視点で授業や学習活動を見直す機会を持つ。</p>	<p>○キャリア教育研修会を1回(計3回計画)実施し、キャリア教育の基本的な考え方や、重度・重複障がい児のキャリア教育についての理解を図った。 ○アンケート(回収率30%)では、提出した全員が研修会の内容が参考になったと回答した。</p>	<p>C</p>	<p>○第2回・3回の研修会では、各学部がつながりを意識した指導ができるように高等部の卒業後の生活イメージの共有を図る内容や、キャリア発達を促す視点で授業を捉える内容を設定し、授業実践や指導を見つめ直す機会としたい。</p>
<p>研究・研修部</p>	<p>主体的・対話的で深い学びを育む授業づくり</p>	<p>○校内研究は3年計画の2年目であり、昨年度は各学部ごとに目指す子どもの姿の共有ができた。 ○「主体的・対話的で深い学び」の捉え方の理解を図る必要がある。</p>	<p>○学習指導要領の視点から、学習の目標を立てたり、「主体的・対話的で深い学び」を育む授業を検討したりする校内研究が行われている。</p>	<p>○アドバイザー派遣事業で「主体的・対話的で深い学び」の捉え方の考え方や授業づくりに関する研修会を企画する。 ○「主体的・対話的で深い学び」のある授業づくりにつながるよう、各学部ごとに授業者シート、授業参観シートを活用した授業公開を実施する。 ○教師個々が自己の実践をChallenge!シートにまとめたものを紹介したりファイリングしたりする。</p>	<p>○新学習指導要領改訂の趣旨や「深い学び」につなげる指導の工夫について研修会を企画・実施した。また、各学部ごとの授業について指導助言を頂く場を設定した。 ○「何を学ぶか」を明確にした授業公開を各学部実施し、より「主体的・対話的で深い学び」にするための方策について話し合う校内研究会を企画した。公開授業では授業者シートを作成したが、参観者の見る視点が不明確になってしまった。 ○教師個々の実践をまとめるChallenge!シートの作成意図や手順などについてオリエンテーションを実施したり、各学部のフォルダを整理したりした。今後、個々の実践が深まるように呼びかけ等が必要である。</p>	<p>C</p>	<p>○アドバイザー派遣事業の講師からの指導助言をまとめ、研究通信で発行し情報の共有を図る。 ○前期公開授業の成果や課題を踏まえ、より主体的・対話的で深い学びのある公開授業に向けて、参観者の見る視点も明確にした指導案の様式を検討する。 ○教師個々がChallenge!シートについて発表する機会を設定したり、指導内容ごとにファイリングしたりする。</p>
<p>人権教育・生徒指導課</p>	<p>育てたい資質・能力を明確にした指導</p>	<p>○年間指導計画に基づいて授業は実施されているが、子どもたち一人一人の育てたい資質・能力との関連づけは十分ではない。 ○年間指導計画のチェックリストの評価を年度末に1回だけ行うため、子どもたちの変容が客観的に捉えにくい。</p>	<p>○子どもたち一人一人の実態に即して、育てたい資質・能力を明確にした指導がなされている。</p>	<p>○年間指導計画のチェックリストの評価を学期末毎に各学習グループで行い、達成状況の共通理解を図り、達成のための方策を立てる。 ○人権教育参観日の公開授業について、保護者(来校者)アンケートを実施し、今後の指導に活かす。 ○公開授業の振り返りを各学習グループで行い、実践記録を作成し、授業改善に活かす。</p>	<p>○各学習グループで話し合いを行い、子どもたち一人一人について年間指導計画のチェックリストの前期評価を行った。今後、育てたい資質・能力を指導者で共通理解して指導を行っていく。</p>	<p>C</p>	<p>○11月の人権教育参観日の公開授業では、育てたい資質・能力を明確にした授業実践を行う。また、参観者からの評価を元に各学習グループで振り返りを行い、授業改善に活かしていく。</p>
<p>できるニーズに対応の向上</p>	<p>自立活動部</p>	<p>○障がいの多様化と重度化の中で、障がい特性や子どもの発達段階を理解した上で実態把握をし、明確な根拠をもって指導できる専門性の向上が急務である。専門性向上のための研修を一部の教員が担っている状況があり、説明できる教員の育成が必要である。</p>	<p>○専門性向上のための校内研修の講師を10名以上の教員が担当し、指導に活かせる実践的な研修だったと事後アンケートで評価した教員が80%以上になる。</p>	<p>○中核教員や県外出張をした教員、外部講師から指導を受けた担任等が学びを活かして研修会の講師を務める。 ○指導に活かすことができるよう、実技研修・演習など内容の活性化を図る。</p>	<p>○4月から7月まで5回の校内研修を実施した。中核教員を中心に7名の教員が講師を務めた。また、すべての研修において実技や演習を行い、実践的な内容になるよう努めた。アンケートに答えた教員の92%が「参考になった」と評価した。</p>	<p>B</p>	<p>○今後の研修においても、夏季休業中に出張した教員を中心に講師を依頼し、研修したことが説明できる教員の育成をする。</p>
<p>健康と生活安全における確ける</p>	<p>保健指導課</p>	<p>○危機管理に関する研修や訓練を実施しているが、緊急対応マニュアルの見直し、研修及び訓練の積み重ねにより、危機管理意識の向上、維持が必要である。</p>	<p>○各種緊急対応マニュアルが改善されているとともに、教職員の危機管理意識が向上し、緊急対応に備えている。</p>	<p>○緊急対応時における流れや役割分担を見直し、マニュアルに明記する。 ○学校医等による病弱児研修、エキスパート教員による摂食指導研修、外部講師による窒息事故対応訓練、不審者対応訓練を実施する。</p>	<p>○窒息事故時や人工呼吸器等の異常時における緊急対応について見直し、マニュアルを整備した。 ○医師を招き、病弱児研修や窒息事故対応訓練を実施した。外部講師による摂食指導研修及び不審者対応訓練は後期に実施予定である。</p>	<p>A</p>	<p>○各学期初めに各学部において、改善されたマニュアルを再点検し、迅速で確実な対応ができるように備える。 ○12月に摂食指導研修、2月に不審者対応訓練を実施し、危機管理意識の向上・維持に努める。</p>
<p>機能の推進</p>	<p>教育相談課</p>	<p>○今年度から本校が西部地区の病弱教育のセンター的機能を担う。 ○地域の病弱特別支援学級設置校数、児童生徒の実態等、全く把握していない。</p>	<p>○病弱特別支援学級のある全小中学校にセンター的機能の情報提供ができています。</p>	<p>○西部地区の全病弱特別支援学級(11校)へ訪問する。 ○担任研修会や相談活動を通して、地域の病弱特別支援学級の児童生徒の実態を把握する。</p>	<p>○病弱特別支援学級のある学校11校中、10校にセンター的機能の情報提供や児童生徒の実態把握ができています。(5校に訪問、6校が来校、残りの1校は、医大の院内学級。) ○継続的に相談支援を行っている、あるいは行った学校は2校である。</p>	<p>A</p>	<p>○西部教育局と連携をとり、訪問の必要な学校からの依頼につなげたい。</p>
<p>開かれた学校の推進</p>	<p>戦略事業部</p>	<p>○皆生ブライト・フェスティバルでは多数の来校者があるが、本校生徒の実習体験を依頼するため、企業開拓等で訪問すると、本校のことを知らない地域の方々に会うことがしばしばある。 ○西部地区にある他の特別支援学校と間違えられることがよくある。</p>	<p>○魅力ある学校行事を企画し、幼児・児童・生徒がいきいきと活動している姿を多くの方に知ってもらおう。</p>	<p>○学校のホームページ等に記事や写真を掲載したり、地域の公民館等へチラシを配布し、来校して頂く様呼びかけを行う。 ○広報的活動を行ったり、雑誌の掲載等の要請に積極的に応じる。 ○アンケートをとり、今後の行事にいかす。 ○幼児児童生徒が体験したことがない活動を用意したり、人前で発表したりする機会を増やす。</p>	<p>○6月の皆生スポレク祭に向けて、地域の公民会等へチラシを配布し来校呼びかけを行った結果、12名の方から事後アンケートを頂いた。(去年のアンケート回収は4名)去年よりは増えている。 ○広報的活動については、毎月ホームページに掲載している。 ○8月末の「なつまつり2018」では、バルーンアートのコーナーを設け、専門講師による実技披露や生徒達が実際に体験することができた。 ○スポレク、なつまつり、わくわく体験についてはアンケートをとって様々な意見が出ている。</p>	<p>C</p>	<p>○チラシを配布する際に、複数の分掌をお願いしているので、配布の方法を検討していきたい。 ○アンケートをもとに課題を見極め、来年度に向けた提案を行う。 ○わくわく体験などで新たな企画を開拓していく。</p>

様式2

その他	総務課	時間外業務の削減 ○毎日勤務時間終了後、1時間以内で退勤する者もいれば、毎月2700分以上の時間外業務を行う者もいる。 ○時間外業務の多い教職員は、ほぼ固定化している。 ○働き方改革に伴い、働き方の見直しが求められている。 ○会議の精選、業務の見直しの観点から、昨年度末、校務分掌組織を再編し、今年度新たな組織で活動している。	○時間外業務の時間が一人あたりの平均時間が前年度比10%減になっている。	○自己の働き方を見直す為の意識改革を行う。(勤務簿の自己管理、退勤時刻の意識づけ) ○時間外業務をしない日(ライトダウンの日)を月2回設定し、状況によっては増やしていく。 ○事前に資料等メールで送付するなどし、会議のスリム化を図る。 ○各分掌部長・課長を中心に分掌業務の見直しを図る。	<table border="1"> <tr> <td></td> <td>4月</td> <td>5月</td> <td>6月</td> <td>7月</td> <td>8月</td> <td>9月</td> <td>前期</td> </tr> <tr> <td>29年度</td> <td>1321</td> <td>1182</td> <td>1216</td> <td>787</td> <td>345</td> <td>936</td> <td>5787</td> </tr> <tr> <td>30年度</td> <td>1218</td> <td>1193</td> <td>1095</td> <td>641</td> <td>316</td> <td>782</td> <td>5245</td> </tr> <tr> <td>前年度比</td> <td>-8%</td> <td>1%</td> <td>-10%</td> <td>-19%</td> <td>-8%</td> <td>-16%</td> <td>-9%</td> </tr> </table> <p>○目標とする時間外業務10%減をほぼ達成することができた。 ○終了時刻を明確にし、会議、話し合いをするようにした。 ○職員が時間を意識しながら業務に当たるようになってきている。</p>		4月	5月	6月	7月	8月	9月	前期	29年度	1321	1182	1216	787	345	936	5787	30年度	1218	1193	1095	641	316	782	5245	前年度比	-8%	1%	-10%	-19%	-8%	-16%	-9%	B	○引き続き取り組みを進めていく。 ○時間数削減ばかりに意識がいった、業務の質が低下しないよう心がけていく。
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	前期																															
29年度	1321	1182	1216	787	345	936	5787																																
30年度	1218	1193	1095	641	316	782	5245																																
前年度比	-8%	1%	-10%	-19%	-8%	-16%	-9%																																
事務室	教育環境及び学校施設の適切な管理 ○老朽化による施設・設備(備品等)の修繕箇所が増えてきており、安心安全な教育環境の整備及び特色ある教育活動の支援のためにも中長期的な改修等が必要である。	○予算の効率化・重点化を推進し、健康や安全に配慮した教育環境の整備を図る。	○効率的な予算執行により、中長期的に学校財務基盤を安定させる。 ○業務改善をはかり、計画的な予算執行に努める。	○業務の執行にあたっては、不断の改革・改善に取り組み、最小の経費で最大の効果を上げることを基本に、効果や必要性を見極めながら適切な執行に努めた。 ・学校施設の長寿命化に係る劣化調査 9月実施 ・水治訓練室プール塗装工事 ・監視カメラ改修工事	B	○前例にとわれることなく、必要性を十分に精査し適期な予算執行に努める。 ○引き続き、法令その他の諸規定に基づく厳正で的確な事務処理手続に努める。 ○執行段階においても必要な改善を加えると共に、執行状況を踏まえて次年度の予算要求を行う。																																	

評価基準 A:十分達成 [100~80%] B:概ね達成 [80~60%程度] C:変化の兆し [60~40%程度] D:まだ不十分 [40~30%程度] E:目標・方策の見直し [30%以下]